

瀬戸内離島における地域住民の生活と定住意向 Life and intention to settle of local residents in Setouchi Remote Island

○中村百花*、服部俊宏**

NAKAMURA Momoka, HATTORI Toshihiro

1. はじめに

島国であり、かつ複雑な海岸地形を持つ日本は、総延長約 35,000km に及ぶ長い海岸線を有しており、国土面積あたりの海岸線延長は 93km² と諸外国と比較しても非常に長い。そのため、沿岸部の重要度は非常に高く、国土保全の観点からも、沿岸部の構造をよく理解する必要がある。沿岸部に 4,130 ある漁港背後集落のうち、半島地域、離島地域、過疎地域のいずれかに指定されているものが 76.9%を占め、また狭隘な土地に立地する集落が 58.8%を占める¹⁾など、沿岸部に位置する集落の多くが条件不利地域である。沿岸集落を対象とする研究は、これまでも集落構成や分類、災害・復興、地域づくり・活性化といった観点から蓄積されているが、個々の沿岸集落の持続可能性に関する現状把握にはあまり関心が寄せられていない。また、漁業と農業をともに生業として営んできた集落に関する知見も少ない。これらの地域で人々がどのようなかたちで生活を成り立たせてきたか、それが現在どのように変化しているか、将来どのような地域デザインをすれば良いかを検討する必要がある。そのためには、条件不利地域である沿岸集落の存続基盤を明らかにすることが必要である。そこで、本研究では、主産業には拘らず、沿岸部に位置する集落を「沿岸集落」とし、地域住民への聞き取り調査の結果より、沿岸集落の主要な構成員である 60 歳以上の住民の生活と定住意向を明らかにした。

2. 調査概要

大津島は山口県周南市に属し、本土から 10km ほどの瀬戸内海に位置する面積 4.73km² の南北に細長い島である。島のほとんどが丘陵地であり、わずかな平坦地に 7つの地区が存在している。人口 219 人、高齢化率 79.4%(2020 年 11 月現在)と過疎高齢化が深刻であり、人口減少率は離島全体の平均と比較しても高い。漁業を主とする一次産業が島の基幹産業であったが、生産額は 1980 年には減少し始めた(図 1)。特に農業の縮小は著しく、2009 年には生産額が 0 となった。人口減少と産業縮小に伴う農地利用の変化や現状については、住民・行政ともに十分に把握できていない。

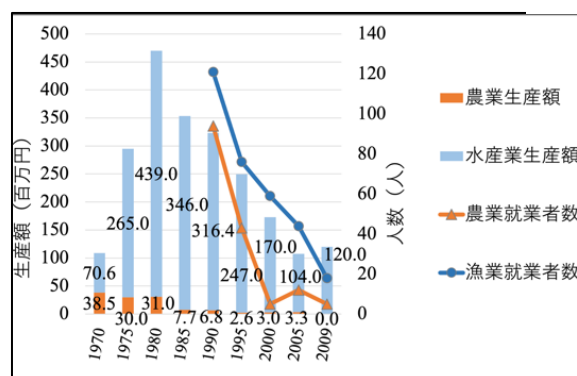


図 1 大津島の農水産業生産額・就業者数
Transition of agriculture and fishery production value and number of employees of Ozushima.

*明治大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Meiji University

**明治大学農学部 School of Agriculture, Meiji University

キーワード：沿岸集落、生活基盤、定住意向、買物、医療、地域資源利用

聞き取り調査は2019年6月、7月、10月に実施した。現在大津島に在住している中心世代である70代から80代の方11名、60代の方3名、合計14名に実施した。対象者の属性は表1に示した。聞き取り調査は原則2名ずつ、各回2時間程度実施した。

3. 結果

対象者は退職後の現在、漁業で生計を立てているJ氏以外は、年金やパートタイムの仕事（島内での雇用）を主として生計を立てていた。H氏以外は自宅付近で自給目的の農業も行っていた。日常生活においては、買い物、病院、草刈りの3つが大変なこととして挙げられた。島には生鮮食料品を扱う商店が無く、住民の主な買い物先は本土（徳山）の商店、島内への移動販売車（週に1~2回）、生活協同組合などの宅配サービスであった。しかしフェリーを利用したの買い物は、高齢者にとって時間的・経済的・労力的な負担が大きい。移動販売車は便利なので、販売日が増えると良いという声が目立った。病院に関しては、島内の診療所に常駐する医師がいないため週3日医師の派遣を受けているものの、本土の医療施設を利用している方が多く、ここでも時間的・経済的・労力的な負担が問題であった。また、緊急時の搬送に時間がかかるという点も不安要素であった。かつては農作業の一部として行われていた草刈りに関しては、現在は体力面の負担が大きく、島全体で高齢化が進んでいるため、作業を任せられる人も少なくなっているのが現状である。

定住意向に関しては、今後も島に住み続けたいという声が多い一方で、いつまで暮らせるかはわからない、将来が不安である、という声が目立った。また、島外に居住する子供たちに対しては、島に帰ってきてほしいが強要はできない、戻ってこなくて良い、という声が多かった。これには、島での生活の大変さを知っているから、島の将来が不安だから、という理由が挙げられており、本当は戻ってきて欲しいという気持ちを言外に滲ませているような方もいた。

4. 考察・おわりに

大津島では、医療施設など生活サービスの縮小に加え、高齢者にとって負担となりやすい作業を担う若い世代が少ないために、島での生活がより大変になっている。日常生活での問題点は将来の不安と直結しており、住民自身が将来について具体的なイメージを描くことができていない。また、販売目的だけでなく自給目的の農業も縮小しており、島の自然資源の利用と住民の生活と乖離しつつあると考えられる。しかし、現状では住民自身の生活で手一杯であり、山地に広がる耕作放棄地などの自然資源の管理にまで手が回っていない。今後は地域住民の生活の現状を踏まえつつ、生活支援策や自然資源の維持管理に関して検討することが必要である。

参考文献

- 1) 水産庁（2020）：令和元年度水産白書

表1 聞き取り対象者属性
Attributes of interviews subjects.

	性別	年齢	居住地	同居する家族
A	男性	81	本浦	妻
B	男性	84	本浦	
C	男性	71	本浦	
D	女性	63	本浦	妹
E	男性	75	刈尾	妻
F	女性	81	刈尾	夫
G	女性	84	刈尾	夫
H	男性	77	近江	妻
I	女性	75	馬島	娘
J	女性	67	馬島	妻
K	女性	68	馬島	
L	女性	70	柳ヶ浦	
M	男性	73	天ヶ浦	妻
N	女性	70	天ヶ浦	